
オレ×アタシ

まころん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オレ×アタシ

【Nコード】

N53200

【作者名】

まころん

【あらすじ】

そこら辺の女子より全然可愛い男の娘がいたら？しかも、そのことをそれなりに楽しんでたら？

これからはじまる高校生活・・・こんなかわいい子が女の子のハズがない！娘が織り成す甘酸っぱいW高校生ライフとは・・・

●小説と言えるようなものではありませんが書いてみました。できたら一言感想、またはリクエストなどいただければ参考になります。

よろしくお願いします。

第一章 1話 新生活

昔からよく間違われた。

そりゃ、小さければ男か女か間違われることも多々あると思う。

まあ、小さい頃は男の子だろうが女の子だろうがだいたい可愛い顔つきだろうから。

確かに自分でも女顔だなーとは物心ついた頃から自覚はあった。

でも、成長と共に少しは男らしくなるかなと思ったところがびっくり・・・そのまんまだし？

ラノベとか男の娘出てくる話とかなら、ここで「俺は男だ!」とか「不幸だ〜!」とか? (間違われることに対して) よく言うんだらうけど。

意外と個人的には結構楽しんだり・・・「緊張するな・・・」

今日は高校の入学式。新しい生活が始まる日だ。

オレの名前は前田美里>まえだみさと<

名前だけで言ったら立派な女子。だけど実際男。なぜかと言ったらオレには兄弟がいて自分が次男なわけだけど、母親は女の子が欲しくて女の子の名前しか考えてなかった。んで実際生まれたのが男だからガッカリしたけど名前だけならありじゃない?とのことで命名ありなのか?と聞いてみたいことでもあるけどあながち今となっては正解だった気もする。なぜなら、誰もがオレを見てまず男だと思う人がいないからだ。

つまり見た目は女そのものにしか見えないってこと。

「さすがに中学とは違うからなあ・・・大丈夫か：な？」

小さい頃から女の子らしく育てられたワケでもない。女の子の服を着させられた記憶もない。ただそれでも周りからは元気な女の子だと、初対面でオレを男だと見抜く人なんか一人もいなかった。

でもオレはそのことを嫌だとは感じず、むしろ楽しんでいた気がする。それは今も変わらないけど・・・

「すっげみんな見てくるな・・・まあ、見た目がこれで制服が男じゃ普通おかしいと思うわな。目立たないうちさっさと行こ・・・」

と言うのも無駄な願い。やっぱ物珍しそうに見てくる見てくるw

(何であの子、男子の制服着てるの?) (さあ? ボクっ娘なんじゃない?)

的な声もかすかに聞こえる・・・

オレはそんな声も聞こえない振りをし、足早に体育館へと進んていった。親は仕事の都合で一緒には来られなかった。まあ、そんなことはどうでもいいけど。

とりあえず自分の席と思われる椅子に腰掛け式が始まるのを待つことにした。

・・・やっぱそこかしこから視線を感じる。

(そーいや制服の採寸の時もやたら見られたな。男子の方並んだら先に並んでた男子も驚いた顔して見てきたし受け付けの人も『そっちは男子用ですよ!』って言ってきたし。まあ、「男子ですけど?」って言った後のほうがウケたけど。)

何だかんだで式も滞りなく終わりオレは体育館を出て改めて校舎を眺めた。

（明日からここに通うのかぁ・・・第一印象ってかなり大切だからな。どうしょ？！何キャラで行こうかな・・・マジ緊張するわ・・・）

ちなみにオレのスゴいところは小さい頃から培ってきた？喉による『声』だ。

シヨタからイケメン、と思えばアニメ、ロリ、萌ボイスなど女声まですせる。いわゆる両声類ってやつだ。正直ちよつとした自慢wだから昔から男だと見抜ける人がいなかったっていうのもある。

自分でも女声で話したら男だってバレない自信あるし。

そんなこともあって高校生活最初の自己紹介をどうするか、それによって自分のイメージが固まってしまうだろうから本気で悩む・・・

（まぁ、家に帰ってから考えよう。ここにいても目を引くだけだし・・・）

そう思ったオレはひとまず家に帰ることにした。

（にしてもやっぱ地元の中とは違って電車使うからホントみんなちらちら見てくるな・・・やっぱそりゃ気になるよな・・・）

オレは帰りの電車の中でもやっぱ注目されてた。確かに街中で男子のブレザー着た女子がいたらなんで？と思う。まぁ、事実男だが。

こんなんじゃない女子の制服着たほうが自然じゃね？と思わないこともないけどさすがにそれはない。

あくまで、男なのに女にしか見えない！ってところがおもしろいんだから。まあ、声変えたら誰も男ってことすら気付いてくれないだろうけど・・・

だいたい家から学校までは電車含めて40分くらい。近くも遠くもないかな？

まだ誰も帰ってきてない家に着いて、とりあえずすることもないんで自分の部屋に入り制服を脱いだ。

ハンガーにかけた制服をしげしげと眺める。

（女子の制服もなくはない？）

ふと思ったがあくまで思うだけにしといた。

「とりあえず、明日の自己紹介をどうしよう・・・」

実はオレは極度のあがり症だ。面接だとかみんなの前で何かを発表するとか、緊張を強いられる事が大の苦手。だから事前に練習しとかないと後々自己嫌悪に陥るのでそういう時は予習を欠かさない。一人なのに口に出して練習するのもバカらしいので脳内練習にしていた。

（はじめまして。前田美里って言います。名前と見た目は女みたいだけど、実際は男です。気軽に話し掛けてください。よろしくね！）

・・・いいんじゃない？いや、いいだろう！無難が一番。下手にキ

ヤラ出していかにもやつちまったなオーラ出すよりは、良くも悪くも普通が一番いいと思う。

だいたいオレの場合は見た目で十分インパクトあるし。

（よし！こんなもんでいいだろう！）

オレは早々に脳内練習を切り上げた。ちなみに極度のめんどくさがりでもある。

ちなみにオレの見た目はというと、身長164、体重47と男子にしてはかなり体重が軽い。小さい頃に体操もやってたので体も軟らかい。前屈も余裕で手のひらが地面に着いて肘が曲がるくらいだ。まあ、あまり自慢にはならないけど。

おかげで身体は結構しなやかだ。他にも書道、硬筆、スイミングにサッカー、公文式や右脳を鍛える教室とやらにも通ってた記憶はあるが余り身になってない気がする・・・

程なくして母が仕事から帰ってきた。オレは部屋から出てきて母親に「おかえり」と一言声をかける。

「ただいま。入学式はどうだった？」

「まあ、普通だったよ。ただやっぱ物珍しそうに見られたけど。」

「だろうね。美里は見た目女の子だから男子の制服着てたら目立つだろうし！」

母は少しおもしろそうに答えた。女の子が欲しかった母からするとオレが女の子っぽいのが案外嬉しいらしい。やっぱりどこか娘を見

るような感じで接してくる。オレは別にそのことを嫌だとも思わないから母親とは仲がいい。

「明日から授業始まるの？」

「いや、なんか午前中は健康診断みたいなの？やるみたい。授業は午後からだって。」

「そうなの？初日から忘れ物とかしないようにしなさいよ。」

「わかってるよ！」

そう言ってオレは部屋に引き返した。とりあえず明日の持ち物チェックしとこ・・・

2話 初登校日

今日はわりと早くに目が覚めた。何といっても今日が最初の登校日だ。初日から遅刻だけは避けたい。寝呆けたままりビングに行く。

「おはよう。朝ご飯は？」

「んゝゝ軽く。」

オレはそう言うソファに腰掛ける。また寝そうだ・・・

「はいっ」

程なくして出てきた朝食を食べながらテレビを見る。天気予報では今日は晴れるらしい。

食器を片付け替えるために部屋へと戻り、制服をハンガーから外し着替え始める。パンツ一枚になってからシャツだけ着てふとそのまま姿見を見てみた。

（まさにこれなんてエロゲ？）

そこにはギャルゲーによくありそうな下着姿にブラウス一枚の女の子が立っている。ただパンティーではなくパンツだけ。

そんなのはいいとして、さっさと制服に着替え持ち物を確認し家を出ることにした。

「行ってきます。」

「行つてらっしゃい。私今日帰り遅くなるからね。」

「なんかあるの？」

「会社の人と飲みに行く。」

「わかった。」

うちの母親はよく仕事帰りに飲みに行くことがしょっちゅうだ。飲みに行くのはかまわないけど、たまに飲み過ぎたときはめんどくさいから嫌だ。ホントに・・・

家を出て高校に向かうまでに何回も見られた気がする。てか見られてる・・・まあ、慣れてるからあまり気にはならないけど。

校門を抜け一年生の下駄箱へと向かう。下駄箱には一つ一つに名前が貼られていた。どうやらオレは6組らしい。持ってきた上履きに履き替え自分の教室へと向かう。ちなみに1学年だいたい40人クラスで8クラスあるらしい。中学と比べたらだいぶクラス多いなあ。早めに学校に着いたからかクラスにはまだあまり生徒は来ていなかった。机にも名前が貼ってあったから自分の席はすぐわかった。場所としては窓側2列目の真ん中少し後ろだったから自分的には良くも悪くもない。あまり前すぎると後ろからの視線が落ち着かないし・・・

することもないし周りの注目を浴びるのも嫌なのでオレはさっさと席に座りホームルームの時間になるまでiPodの曲を聞いて時間をつぶすことにした。

少しするとだんだん生徒も集まりだし、程なくして担任と思われる若目の男性教師が入ってきた。

「えー、今日から一年間みんなの担任をすることになった瀬高武夫>せたかたけおくと言います。自分も担任としてクラスを受け持つのは初めてとなるので、一年間よろしく願います。」

思った通り新人教師だ。比較的歳も近そうだし見た目も爽やかでなかなか好印象な先生だな。

「とりあえず出席からとるからー。みんな先生がちゃんと顔を覚えられるよう大きな声で顔を見て返事をしてくれよ！」

こういう先生は嫌いじゃない。一年間楽しくやれそうだ！「それじゃー、安達隼人！」

みんなちゃんと声を出して返事してる・・・みんなもいい印象を持ってるようだ。次々と先生は名前を呼んでいきオレの番が来た。

「・・・前田美里！」

「はいっ」

・・・何も反応しなかった。普通の女子生徒と勘違いしてないか？
その後も先生は元氣良く生徒の出席をとっていき氣付いたら出席確
認は終わっていた。

.....

「とりあえずこの後午前中は健康診断するから、うちのクラスの番
がくる前にそれぞれ自己紹介するか！」

先生はおもむろにそう言いだすと

「じゃあまずは先生からだ！さっきも言ったとおり名前は瀬高武夫
と言います。趣味は映画鑑賞と地元の奴らとフットサルすること
です。一年間よろしくお願いします。みんなもこんな感じで簡単でい
いから自己紹介していってくれ。んじゃ、番号順で安達から・・・」
いざ自己紹介となるとやっぱ練習してても緊張してくる・・・
そう思ってるうちにオレの前の人の自己紹介が終わってしまった。
次はどうとうオレか・・・

「それじゃ次前田！」

「・・・はい。前田美里と言います。名前と見た目は女みたいです
ちゃんと男です。みんなと一年間楽しく過ごしたので気軽に話
掛けてください。」

・・・なかなかうまく言えたんじゃないか？とにかく無事に自己紹
介出来た！

「・・・えっ??？」

先生が驚いた顔でこっちを見てくる。

「おまえ男なのかっ?！」

失礼な！やっぱコイツ勘違いしてやがったか・・・

「ええ、まあ・・・」

『ええー!?』

教室中が騒ついた・・・やっぱみんなも女子と思ってたらしい。

「しっ、静かに！まあみんなの気持ちもわかるが先に自己紹介をすませよう！次・・・増岡！」

やっぱそうなるよなー。自己紹介の時は特に声変えてないけどもともと中性的な声だからわからないか。この後大変そうだな・・・

「よしっ！自己紹介も終わったな。とりあえずうちは先に視力検査からするから席を移動させてくれ。気になる話はそれからだ！オレは道具をとってくるからその間に移動させとけよ！」

先生はそう言うのと教室を出ていった。

先生がいなくなるやいなや、オレはあっという間に囲まれてしまった・・・

「前田さんって男の子?！」

「名前はホントに美里なの?？」

「私ずっと女子だと思ってた！」

・・・珍しいのはわかるけどオレは聖徳太子じゃない！一気に質問されても聞き取れないって！

「あの・・・一気に質問されても・・・」

「待って待って！じゃー、みんなが一番気になってることを聞こう！前田さんってホントに男子?」ああー、こういう仕切りやタイプいるなー。なんだっけ?この人、堀江って言ったっけか?

「まあ、戸籍上完璧男です。」

「それは性転換とかじゃなくて?」そこまで突っ込んで聞くか普通

?! まずいだろ!

「生まれつき男だけど。」

「・・・こんな可愛い男子いるんだ・・・」

その時、ガラガラッと音を立てて扉が開き先生が戻ってきた。

「机移動しとけて言っただろ・・・ほら! 早くしろ!」

先生がそう言うともみな急いで机を移動しはじめた。

(予想はしてたけど助かった・・・)

その後も健康診断の合間をぬって色々と質問をされた。やっぱオレみたいなのは周りで見たことがないらしく興味が尽きないらしい。中学の頃は小学校からの付き合いでみんなオレの見た目にも慣れていたから、久しくこんなに注目されてオレ自身少し戸惑った・・・

午前中の健康診断が終わり昼休みの時間になってもオレは忙しかった。

(とりあえず学食にでも行こうかな・・・)

「前田! 飯持ってきてる? なかったら一緒に学食いかね?」

そう言って声をかけてきたのはいかにもサッカー部ってノリの酒井って奴ともう一人は眼鏡のインテリっぽい成田って二人組だった。そーいえば自己紹介する前から仲良さそうだったな・・・

「ちようど行こうと思ってたからいいよ。」

「ええゝずるい! あたしたちも前田君とご飯食べたかったのに!」
そう言ってきたのはさっきの仕切りたがりの堀江だった。

「ごめんね・・・また今度!」

そうオレは苦笑いし言う二人について学食へと向かっていった。

「学食とかちょっと憧れだったんだよね!」

中学では給食だったから正直自分で食べたいものを選んで食べられる学食というのにオレは憧れを抱いていた。

「前田も？オレも実は楽しみだった！」

そう答えたのは酒井だった。

「なんかいかにも高校生って感じだしね！」

成田も楽しみだったみたいだ。

そう離れてない学食に着くと3人は各々好きなものを頼み席へと着く。

「俺の名前覚えてる？」

学食を食べながら酒井がオレに聞いてきた。

「酒井・・・だっけ？」

「覚えてるん？記憶力あるなあ。とりあえずもっかい軽く自己紹介しとくけど、俺は酒井正広！んでこっちが成田純一！」

「勝手に人の自己紹介すんなし！」

なんか若手芸人のコント見てるみたいだ・・・

「先に言われたけど俺が成田純一ね！これからよろしく！前田は美里っていうんだっけ？」

「そう。女みたいでしょ？見た目も。」

「マジで男って言った時ビビったし！んじゃ、名前美里でいい？俺はむかしからまーって呼ばれてるからまーでいいよ。こっちは順一だから順で！」

そういつて酒井・・・まーはオレに言ってきた。

「いいよ！よろしく！」

オレも名前で呼び合う方が仲が良く慣れそうだから好きだ。それにこの2人とは気が合いそうだし！

「でもさー、美里って前からそんな女の子っぽいの？」

今度は順が興味津々と言った感じで聞いてくる。

「そだよ。昔から。てか初対面で男と思われたこと一度もないし！」

「だよね！つかそこら辺の女子より全然可愛いし！w」

「周りからしたら何で女子生徒が男子の制服着てるんだって思うだろうね！」

「オレもいつそ女子の制服にしようかと思ったよw」

『全然イケる!!』

見事にハモった! この2人はホント気が合うんだろうな。これから楽しくなりそうだ! 昼休みが終わるまでオレたちは学食で話し込んでた。午後は普通に授業が始まるらしい。

「そろそろ行かないとヤバくね?」

「そだな。んじゃ、行こうか!」

学食を後にし教室へ戻ることにした。

教室に戻るとクラスのほとんどの女子が固まって話していた。

「あっ! 戻ってきた!」

その中にいた堀江がオレを見つけるなり近づいてくる・

(何なんだコイツは・・・)

正直しつこいと思ったが、入学早々クラスメイトを邪険に扱うのは良くない。女子を敵にまわしたらとんでもない事になりそうだ・

「前田君! 帰りちよつと教室に残ってくれる?」

「えっ? 何で?」

「いいからっ!」

「はあ・・・」

無理矢理押し切られる形で話を切られた。マジで何だ奴は!

(これがクラスで一番可愛い娘だったらオレも内心ガッツポーズなんだけどなあ・・どう見てもマツコ・デラックスにしか見えない・・

・

「大変だな美里も・・・」

「ああ・・・」

2人もオレの心境は察してくれたみたいだ。

授業自体はそんなに難しくなかった。といっても最初の授業なんてそんなもんだよな。

午後の授業が終わり後片付けをしているとなんだか廊下のほうが騒がしい・・・

何かと思って廊下に目をやるとそこにはたくさんの生徒が立っていた。そしてその注目してる視線の先がオレだ・・・まさかこんなに広まるとは・・・

向こうでキャーキャー何かを話してはこっちを見るの繰り返しだ。

「初日からずいぶん人気者だな。」

まーがオレに言ってきた。

「人気者は辛いよ・・・」

まあ、楽しんでもいるけどw

「美里このあとなんかあんの？」

「あー・・・堀江さんだっけ？あれ。」

「その後は？」

「何もないよ。」

「んじゃ、帰りちよっと大宮寄らね？」

「いいね！んじゃ、ちよっと待っててよ。」

大宮とはうちの生活圏内で唯一の繁華街だ。大体買い物はそこで済ませられる。

「んじゃ、終わったらメールして！」

「わかった。また後で！」

そういつてまーと順は教室を出ていった。オレはとりあえず荷物を机に置いておきトイレに行こうと思い教室を出ようとしたら、

「前田君どこ行くの？」

と堀江がオレを呼び止める。

「ちよっとトイレに・・・」

「早く戻ってきてね！」

・・・コイツはヤバいんじゃないか？しつこさが・・・

オレはとりあえずやんわりとスルーしてトイレに向かった。トイレで用をたし手を洗って鏡を見る。オレは基本的にあまり髪にワックスは付けない。サラサラな髪が自慢でもあり女子と間違え原因の一つでもあるが、小さい頃から美容院は苦手なのであまり髪は切らな

い。おかげで今では長さが肩につくほどある。正直うつとうしいとも思うこともあるが似合っていると云われるからまんざらでもなかったりする。

オレは持ってたゴムで髪をくくりポニーテールにした。家じゃいつもこれだ。何てったって楽だしオレ自身ポニーテールが好きってこともある。でも普通の男がロン毛（死語）でポニーテールとか超イケてない（死語）けど。オレの場合女にしか見えないから問題ない！

用を済ませ教室に戻ると早速クラスの女子からポニーテールについて突っこまれた。

「ポニーテール可愛いね！」

「前田君ポニーテールすごく似合う！」

さすがに何か狙いすぎたみたいで恥ずかしい・・・

「ありがとう・・・」

「てか前田君ってなんか『君』って感じじゃないから美里って呼んでいい？」

「全然かまわないよー」

・・・いつの間にか女子に囲まれていた。その後なぜか全員とアドレス交換をして昼休みにオレに聞きたかったと言う質問を答える羽目になった。

「美里って昔からそんな可愛いの！？」

「可愛いかどうかは知らないけど前からこんなだね・・・」

「家じゃいつもポニーテール？」

「そだよ。楽だし。」

「ねえねえ！美里ってこれ似合いそうじゃない？」

そう言ってもう一つのゴムを取り出してきたのはクラスでも一番可愛い（個人的に）田村絵里＞たむらえり＜だ。

「ちよっといい？」

そう言うや否やポニーテールにしてたゴムを取られ頭頂部付近で左右に縛られた。いわゆるツインテールだ・・・さすがにコレは・・・

「めっちゃ可愛いし！なんかみさみさに似てない？！」

「似てる！みさみさいいじゃん！」

「あだ名みさみさにしよう！」

あだ名つくの早っ・・・ミサミサってデ○ノートのアレだろ・・

「いや！さすがにないって！」

オレはさすがに拒否したがすでに決定事項らしい。。。

とりあえずツインテはすぐに解きポニーテールに戻しゴムは田村に返した。

「可愛いのに・・・」

「さすがにこれじゃ学校来れないって！」

ツインテールはいくらオレでも恥ずかしい！

「てかみさみさの声って地声？」

あだ名がつくと呼びやすくなるのか、そう聞いてきたのは童顔だけど化粧がちよっと濃い武田里香＞たけださとかくだ。化粧薄いほうが可愛いと思うけど言えるわけない。「ああ、これは地声。」

「男の子なのに高いんだね。女の子っぽくしゃべってみて！」

「女の子っぽく？」・・・出来るけどまだあんま本気出さないほうがいいかな。

「あ・ああ・・・『こんな感じかな？』」

オレはちよっと大人しい正統派ヒロイン風の声を出した。すると周りから喚声があがる。

「みさみさってスゴいねっ！」

「声優みたいじゃない？」

・・他にも色々出せるけどここで全部ネタを晒すのはもったいない気がする。ってかまーと順を待たせてるんだった！オレは机のうえのバッグを取ると

『ゴメンね！アタシ人を待たせてるから先に行くね。また明日学校で！』

と少しさっきとは違う元気な少女風の声色でみんなに別れをつけ教

室を出ていった。すると後ろから

「えっ？違う声も出せるの！？明日もつと聞かせてよ！」
と武田の声がした。・・・ちよつとサービスしすぎたかな？

3話 放課後

教室を出てまーにメールをすると校門にいるとのこと。オレは後れてしまった分少し急いで校門へと急いだ。階段を降り職員室の前へと差し掛かった時ちょうど職員室から担任の瀬高先生が出てきた。

「おう。前田じゃないか！」

「あっ、先生。」

「しかしホントおまえ見た目は女にしか見えないな！」

「よく言われます。」

「女子の制服でも違和感ないんじゃないか？」

「先生が着ろって言うなら着ますけど？w」

「マジで？ってバカにすんなwまあ、帰るなら気をつけろよ」

そう言って先生はオレが今下りてきた階段を上っていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5320o/>

オレ×アタシ

2010年11月3日20時23分発行